

第5回「鉄道の日」記念 フォトコンテスト

受賞作品 および
審査委員長のコメント

平成30年10月13日

第5回「鉄道の日」記念フォトコンテスト
入賞者表彰式



●フォトコンテストの審査を終えて

審査委員長 十文字義之

10月14日の「鉄道の日」を目途に、基幹輸送としての鉄道が多くの方々に対する認識と理解、更には親しみある鉄道の在り方をPRするため、全国の各運輸局において様々な取り組みを行っています。

国土交通省関東運輸局では、鉄道事業者で構成する「鉄道の日」関東実行委員会を組織し、PRの一環として管内における鉄道を被写体とする、「鉄道の日」記念フォトコンテストを毎年実施しています。本コンテストは、多くの方々が管内でとらえた鉄道をテーマとする写真作品を一般公募し、日夜欠かすことの出来ない鉄道輸送の親しみと認識、理解を得て頂くことはもとより、写真映像を通して新たな視点と鉄道輸送に対する再認識を得て頂くものです。その暁には、受賞作品の選考発表、表彰、公開するとともに、更なる鉄道に対する原点を見つめる一つの切っ掛けとなることを願っています。

本コンテストの審査においては、十文字義之(写真家・公益社団法人日本写真家協会会員)を審査委員長に、竹内健蔵(「鉄道の日」関東実行委員会会長・東京女子大学教授)、土岐勝広(「鉄道の日」関東実行委員会委員長・東京都交通局総務部長)、原健人(原鉄道模型博物館副館長)、三村伸弥(株式会社テレビ神奈川総務局社長室長)、櫻井浩志(国土交通省関東運輸局鉄道部長)を審査委員に、9月3日には448点の応募作品の中から予備審査を行うとともに、9月12日には、本審査を横浜第二合同庁舎会議室において職員立会いの下、公平且つ厳正なる審査を行ったことを先ずはご報告申し上げます。

審査の結果、最優秀賞1点、優秀賞4点、審査委員賞6点、フレート賞1点、テッピー賞(中学生以下)1点、テッピーナ賞1点の計14点を選考し、以下の通り受賞者を決定致しました。最優秀賞に輝

いたのは、平野昌子さんの「例祭」で、神輿の鈴に移り込んだ江ノ電が写り込む情景をダイナミックに表現し、簡素化された光の明暗を駆使したフレーミングは、他の作品を寄せ付けないパワーを持つ作品でした。審査委員一同、誰もが引き寄せられた一推しの力作でした。

今回寄せられた様々な視点でとらえられた作品群は、昨年を 157 点増の 448 点(昨年 291 点、一昨年 455 点)で、応募者数は昨年を 48 名増の 159 名(昨年 111 名、一昨年 182 名)と前回を遥かに上回る質量ともに向上する応募となりました。一方、「フレート賞」も旅客に負けない作品の重量感を表し、輸送という観点においていずれも同じ眼差しで見据えてくれたのが伺えます。また「テッピー賞」では若い視点の中に鋭さが垣間見れる作品が寄せられ、さらなる今後の力作に期待したいところです。上位入選された作品は、いずれも甲乙付け難いものばかりであり、平野さんの作品は審査委員を唸らせる力作であったことは言うまでもありません。

鉄道フォトコンテストという観点で言えば、自ずと旅客輸送の視点で構成することが大半を占める一方、貨物輸送も「運ぶ」という概念は同じです。貨物輸送を見据えて行く中で、貨物鉄道は暮らしと産業を支える欠かすことの出来ない輸送モードであることを決して忘れてはならない分野であると考えます。今後、撮影活動の中で旅客と貨物のモードに対して双方の眼で見据えて欲しいと願う一方、1 年を通して持続継続した撮影活動により、来年に繋がる多くの作品を審査委員一同、期待しています。

●審査総評

応募された作品の総体は、①鉄道のシンボリックな車両そのものに焦点を置いたもの、②輸送機能としての駅空間における相貌、③路線環境(風景)と鉄道との調和、などの作画が大方で占められ、その季節感や時空間が十分表現されている。審査委員たちは、鉄道事業や映像分野に永年携わってきた方々ばかりで、言わばその道のプロである。寄せられた写真群は個々の著作者の想いが詰まっており、それは言わば自己表現であり、応募された全ての方々に賞を与えてあげたいのは、審査委員共通の思いである。その一方、コンテストという位置付けでは、作品に甲乙を付けるという作業がどれだけ辛いものか、誰もが認識している。

審査委員は、寄せられた写真群を前に、審査規定をクリアし写真映像として優れた作品である、ということとはもとより、応募者個々を一人の写真作家としてとらえ、著作権者自身が主催者に対してどのようなメッセージを送り、併せて個々の鉄道に対する眼差しや考え方、主催者の意図を十分汲み取り、審査する構えとしている。

応募者の年齢別応募数で見ると、男性は40歳代～70歳代のウエイトが最も高く77%を占める一方、女性は50～60歳代が多く47%となっている。とりわけ、昨年同様シニア層の写真熱が非常に高いものが伺える一方、10歳代のウエイトも高い。デジタル化社会において、低年齢層でも誰もが簡単に写真が撮れる時代。若年層は、とりわけ写真を撮る要素と機会を備えていることから裾野の広がりが見える。写真そのものは撮ってもそれがコンテストに耐えられるかどうか、敷居の高さがネックとなり、応募するまでに至らないという傾向があるのは事実ある。鉄道愛好の世代をみると、必ずしもシニア層で占めている訳ではなく、低年齢層から高配まで年齢層を問わないのが鉄道愛好の魅力でもある。自らとどめている写真と作品として創り上げるプロセスや責任がコンテストにおいては二極化していることも確かである。

一方で、今まで少なかった女性作家の進出が着実に見えてきた。蓋を開けてみると、鉄道愛好家や写真愛好家という位置付けではなく、最近写真が面白くなってきたとか、鉄道に対する知識がなくとも、車両のフォルムが可愛いとか、女性の目線でとらえられている作品が多い。これまで、男所帯であった鉄道愛好の中で、女性が新たな視点と優しい眼差しで新風を吹き込んでくれていることは喜ばしい限りである。

このような、決して写真や鉄道愛好に対するキャリアではなく、個々の感性や眼差し、写真の背景にあるメッセージ性が見え隠れするものがないと、第三者(審査委員)には伝わらないものがある。また、審査段階では、裏書は最終段階でのチェックでしか確認しない。あえて設定しているのに見ない、というのは何故ということであるが、必ずしもタイトルやコメントが写真と一致していないことが多いからである。タイトルやコメントは示しているものの、写真はそうは言っていない、ということである。作者が現場に立ち、被写体に相対した時、これまでイメージしていた作画や思いにどれだけ近づけられるのか、が鍵となる。しかし、現実にはそうはいかないのもので、写真となると見事に覆されることも多い。想像していたものとは別の観点でとらえられる偶然性の面白さ、思い通りにならないのが、写真の楽しさなのかも知れない。

●第5回「鉄道の日」記念フォトコンテスト入賞作品

最優秀賞	「例祭」	平野 昌子	(神奈川県横浜市)
優秀賞	「蒼い刻」	饗庭 正志	(神奈川県南足柄市)
//	「キス確認」	大石 良則	(静岡県三島市)
//	「嵐の中の『SL もおか』号」	柴平 達弥	(東京都三鷹市)
//	「とおりゃんせ」	遠藤 龍雄	(東京都目黒区)

十文字義之審査委員長賞	「妙妙たるひとり時間」「見守り続けて」	今井 好美	(神奈川県川崎市)
竹内健蔵審査委員賞	「夏彩の塔とスカイツリーライン」	佐々木 孝安	(埼玉県所沢市)
土岐勝広審査委員賞	「一本木の風景」	玉村 雅美	(東京都足立区)
原健人審査委員賞	「晩秋の夕陽の中から」	濱島 康郎	(群馬県みどり市)
三村伸弥審査委員賞	「お茶の水駅・三路線物語」	片山 和澄	(神奈川県横浜市)
櫻井浩志審査委員賞	「ニャンに注意」	石田 俊幸	(東京都江戸川区)

フレート賞	「光る線路」	高橋 康資	(神奈川県鎌倉市)
テッピー賞	「黄昏」	木戸 鴻之介	(東京都江東区)
テッピーナ賞	「もうすぐ秋」	高橋 秀子	(埼玉県坂戸市)

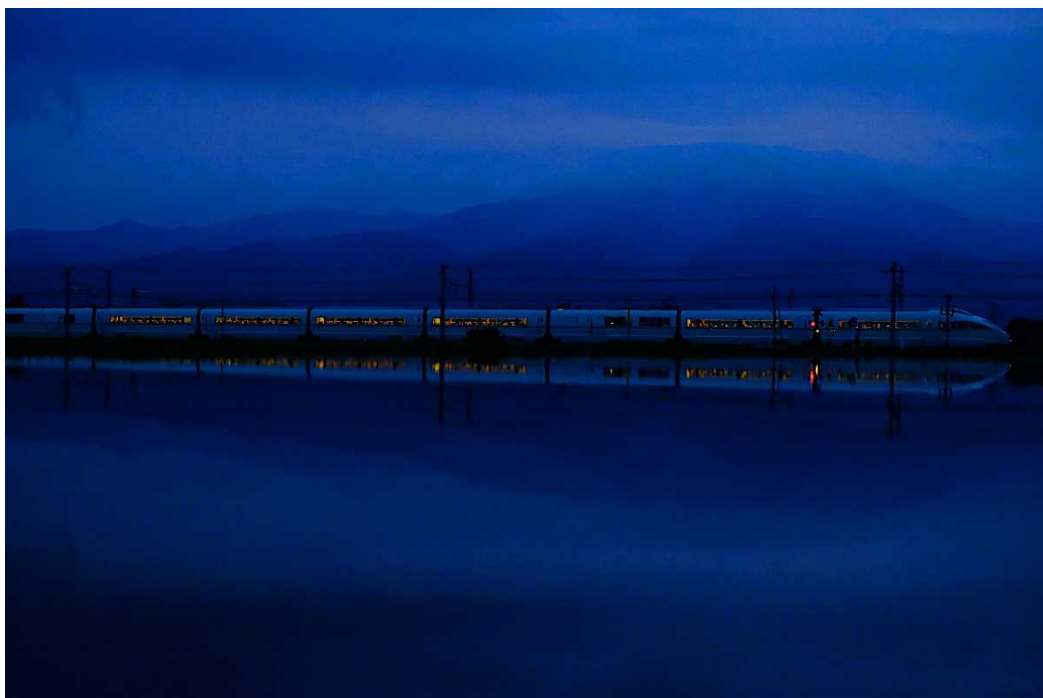
(敬称略)



最優秀賞 「例祭」

平野 昌子さん（神奈川県横浜市）

江ノ島～腰越に至る併用軌道で行われる夏の例祭は、江ノ電の行方を抑えるほどのパワーがある。一方、永年繰り広げられてきた例祭は、暗黙の了解というべく、鉄道と街との共生が十分垣間見れる。天王祭と江ノ電の風景は、不動のテーマとしてこれまでも多くの方々が寄せてくれたテーマだった。しかし、同氏の視点はこれまでにはない新たな眼差しであり、祭りの賑わいとは裏腹に、静寂を見事に自らのものとしてとらえ、輝く鈴のエッジ感と紫の質感との調和が見事に表現された。デフォルメされた鈴に移り込む江ノ電、併用軌道のリズム感がいい。黒バックに一層のコントラストを引き立たせ、観る側に安心と安らぎを呼び起こしてくれた作品だ。現場に立ち会い、被写体に対する平野さんの新たな視点が開花したといえる。一方的なお約束の視点にとどまらない、決して借り物ではない、多面的な視点を以て今後の作画に期待したい。



優秀賞 「蒼い刻」

饗庭 正志さん（神奈川県南足柄市）

紺碧のモノトーンを駆け抜けるVSEの静寂さに、審査委員一同が吸い込まれていた。地元ならではの同氏の綿密さが十分伺えた作品である。風景写真に欠かすことのできない環境との調和が、見事に表現されており、天候をはじめとするコンディションが饗庭さんの味方についてしまったようだ。蒼い情景に水鏡に浮かび上がるボディー、見え隠れする室内灯の優しい光が一層、作画を引き立ててくれた。写真の持つ空気感、神秘的な写真表現は、饗庭さんが兼ね備えたキメ細かさの表れでもあり、現場との心の共生ができる方だと認識している。厳しいコンディションの下、冷静且つ見事にとらえられた力作である。



優秀賞 「キス確認」

大石 良則さん（静岡県三島市）

東京駅で組成した成田エクスプレス。大石さんの擬人化した作画表現に、審査委員誰もが微笑んだ。タイトルの滑稽さも相俟って、実に微笑ましい光景である。併せて、写り込んだ乗務員双方が女性であったことも幸運だった。大石さんの洒落気さも十分伝わるし、鉄道の親しみと認識が理解できる作品である。少々ホワイトバランスが崩れた色調も、地下ホームの雰囲気醸し出している。



優秀賞 「嵐の中の『SLもおか』号」

柴平 達弥さん（東京都三鷹市）

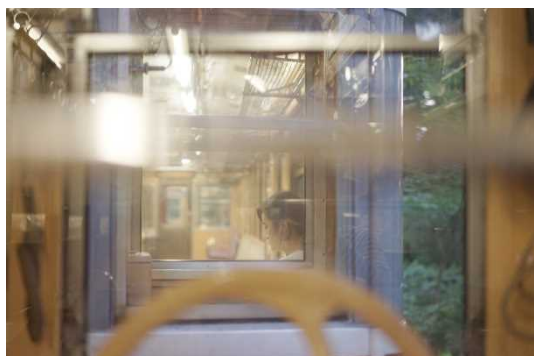
モノトーンの重量感ある作画に圧倒された。その作画が写真にも関わらず映画のワンシーンにも見えた。天候不順にも関わらず、柴平さんの努力を評価したい。低速で切っていることから雨が何処となく雪にも見える。そのような、写真全体から様々な想像力を掻き立てる要素が十分に凝縮した作品である。苦勞して捉えた作品には、作者のプロセスが垣間見られ、生き生きと活動する。安定した作画に見る側も安心して観賞できた。



優秀賞 「とおりゃんせ」

遠藤 龍雄さん（東京都目黒区）

ある審査委員が「この写真面白いです」と拾った。林立する架線柱がひしめき合い、短編成の池上線が駆け抜けていく光景である。目を凝らせば、架線柱の高さが半端ない。どう見ても通常の倍の高さがある。上が送電線、下が架線であることを後から認識して納得した。一方、ここは何処の細道じゃと言え、池上線沿線で俯瞰で撮れるスポットがあること自体、名所でもなく余り知られておらず、雑居ビルに入った居酒屋からのとらえた、作者のとおきおきのスポットであった。俯瞰した池上線を眺めながら、フランジ音を肴に呑める作者の粋さが見え隠れする。



十文字義之 審査委員長賞 「妙妙たるひとり時間」「見守り続けて」

今井 好美さん（神奈川県川崎市）

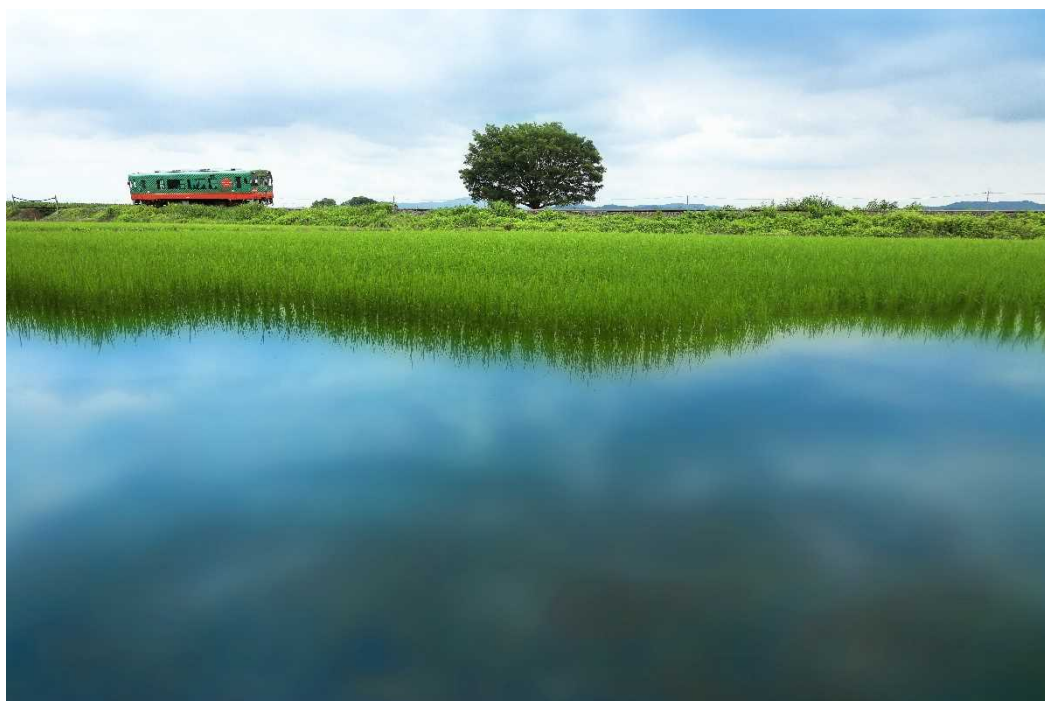
パステル調の柔らかな作画の中には、見逃すことのできない同氏の物語があつた。組写真の規定はないものの、双方の写真は時空間が同じで、当審査委員が一つの括りとして構成をしたことを了承して欲しい。当方の勝手な想像だが、生活を取り巻く仕事や様々な環境下で、時としてふと現実逃避に駆られることがある。それは、自分自身をリセットして、再び現実に戻るためのパワーチャージなのだ。今井さんも、そのようなひと時を過ごすために、箱根を訪れたに違いない。紫陽花の彩と室内灯の温かさが相俟って優しい時間が過ぎていく。一方で、今井さんの兼ね備えたキメ細かさも十分感じられる中、様々な想像力を掻き立てる良い写真だ。勾配をぐんぐん上がって行く登山列車に揺られ、ふと隣の車両に目をやると、一人の女性が座っていた。もしかしてこの方も自分と同じプロセスを楽しんでいるのでは、とオーバーラップして共感してしまう。作者の感情移入がストレートに写真表現された作品に、写真を読むという機会を与えてくれた素晴らしい作品である。



竹内健蔵 審査委員賞
「夏彩の塔とスカイツリーライン」

佐々木 孝安さん（埼玉県所沢市）

今年の夏は、記録的な猛暑の夏だった。日中の厳しい日差しとは裏腹に、夏夜の都市空間は、優しい光跡を放ちながら安らぎが感じられた。人工光に照らされたスカイツリーラインとレインボーにライトアップされたスカイツリー、建築物が織りなす美しさ、空を大きくとったことで空気感がよく表現されている。厳しい撮影条件にも関わらず、挑んだ同氏の作画に軍配を上げる。経時変化で色合いも変わるので、再び現地へ出向き、そのプロセスを味わって欲しい。



土岐勝広 審査委員賞
「一本木の風景」

玉村 雅美さん（東京都足立区）

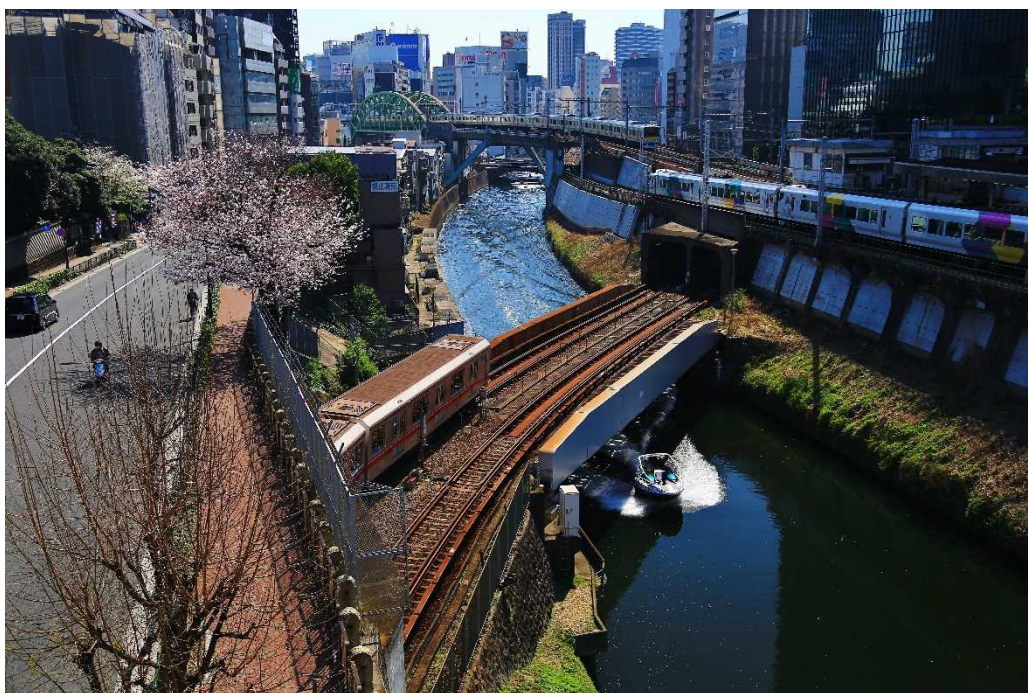
湿地帯を懐に一本木を背景とするメルヘンチックな田園地帯を内燃動車が単行で駆け抜けていく。緑と青空を包み込んだ水鏡のコントラストが素晴らしい。車両、一本木、水辺のポイントを明確化する一方、簡略化した作画に玉村さんの優しさが伺える作品だ。欠かすことのできない地域鉄道の親しみや路線環境も十分表現されており、安心して観賞できる。画題通り、一本木をセンターに置いた作画だが、今度は木を右に置くとか、水面のウエイトに変化をつけるなどのバリエーションを出してみると、もっと広がりが出ると思う。



原健人 審査委員賞
「晩秋の夕陽の中から」

濱島 康郎さん（群馬県みどり市）

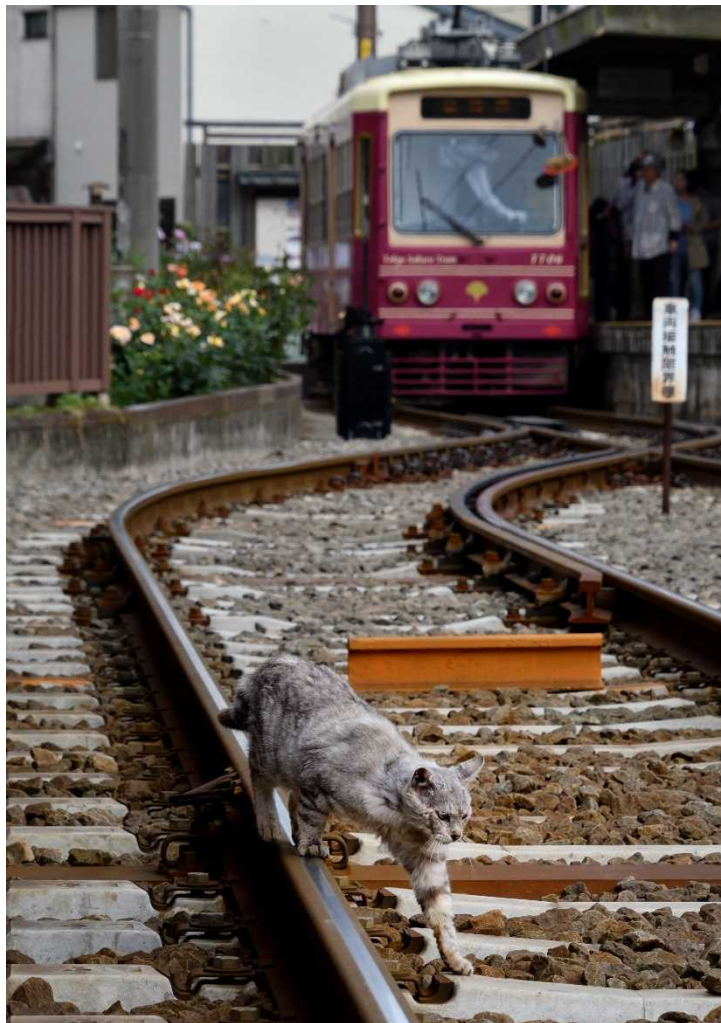
わたらせ渓谷鐵道をテーマとした四季折々の作品は、毎年多く寄せられる。路線環境の素晴らしさ、忘れかけていた日本のローカル鐵道を今に伝える原風景が残っている。そのようなスポットを熟知している濱島さんの地元ならではの強みのだろう。撮影のプロセスで大切なことは、予備知識があるかどうか。知らないのと、知っているとの違いは、結果を大きく左右する。同氏の蓄積されたわたらせ渓谷鐵道に対する認識と理解が十分に伝わる。安定した作画は、正に同線のおきスポットの集大成と言える。



三村伸弥 審査委員賞
「お茶の水駅・三路線物語」

片山 和澄さん（神奈川県横浜市）

聖橋から俯瞰した御茶ノ水駅の相貌は、鉄道、水運、オフィスビルなど都市環境が集合した正しいジオラマのように見える。併せて、鉄道愛好家のもとより、この場所からカメラを向ける者も多く、各線を同時に収めるというのは至難の技なのだ。しかしながら、列車時刻を調べて数字上は合致していても、現実にはタイムラグがあるため、偶然を狙うしかない。中央線、東京メトロに加え、船舶が同時に織り成す風景を見事にとらえた作品で、正に同氏の粘り勝ちと言ったところだ。ダメだろうと思ったら写真はそこで終わり。正しいスタンスで立ち向かった時に、チャンスは向こうから付いてくるもの。



櫻井浩志 審査委員賞
「ニャンに注意」

石田 俊幸さん（東京都江戸川区）

今年も、都電荒川線をテーマとする作品は多かった。都心の鉄路で最も地域と共生する姿が感じられるのも、荒川線の魅力と言える。地域ネコなのだろうか、パトロールの経路に軌道があって、跨がなくてはならない。石田さんの作画から、その親しみやすさと動物が街と共存する姿が十分に表現された。併せて、荒川線が通り過ぎるのを見計らってネコが申し訳なさそうに渡っていく様子も見受けられる。同氏の動物愛護の眼差し、住民が写っていないくても、その街の優しさが良く理解できる。



フレート賞 「光る線路」

高橋 康資さん（神奈川県鎌倉市）

夕陽に照らし出された燃料輸送のタンク車が留置され、本線から放射線状に伸びる光り輝く副本線。貨物鉄道輸送の安定性と正確性を感じられるとともに、車扱貨物が送油し続ける持続継続性も十分理解できる作品だ。当たり前の風景に対し、カメラを向ける行為は時に躊躇してしまうもの。いつでも撮れるという甘い認識から後回しに成り兼ねない。高橋さんは、いつも見ている情景を的確に自分のモノにしている。構内の情景、臨海鉄道からJRへの受け渡しの流れ、組成の動き、根岸のイイ顔を知っている方だと認識する。左手にタキ車をさりげなく配置した憎いフレーミングも好感が持てるし、日本一の車扱取扱量を誇る貨物駅の相貌が生き生きと活動する。



テッピ一賞 「黄昏」

木戸 鴻之介さん（東京都江東区）

夕日を受けて邁進する新幹線を捉えた作品だが、他の作品を寄せ付けない大人染みた作画であった。かなりの長玉で引っ張る簡素化された新幹線のフォルムは、スピード感よりも輸送の安心感を受けた。

「木戸さん本当に鉄道が好きなんだね」という問いに、心からハイと言える方だと確信する。併せて、カメラのノウハウも熟知している。当方も同時期を振り返ると、望遠レンズを振り回して試行錯誤した時代があった。そのような彼のプロセスと何処となくオーバーラップしてしまったようだ。今後も、決して借り物ではない、自身の写真創作に励んで欲しい。



テッピーナ賞 「もうすぐ秋」

高橋 秀子さん（埼玉県坂戸市）

広角レンズを用い、特有のパースペクティブな空気感を表現した高橋さんの作品には、優しさがある。暑かった夏も雲を見れば秋の気配を感じ、季節の移り変わりを伝えていた。2両仲良く並んで駆け抜けていく八高線の緑と青空のコントラストが絶妙で、このフィールドが、高橋さんにとって何よりの「宝物」なのだと認識する。そして、写真も「私の一番好きな場所ですが、どうでしょう?」とメッセージを送っている。女性作家のエントリーは回を重ねる毎に質ともに上昇傾向にあり高度化している。キメ細かさと独特の質感を兼ね備え、男性作家を寄せ付けないパワーを持っている。